

実態に即した教育相談の実践

——自発相談への姿勢育成をねらって——

中頸城郡柿崎町立柿崎中学校教諭 高 原 信 正

はじめに

教育相談は形式ばって行なおうとすると、うまくいかないということを聞いたことがある。私たちはへいぜい教育相談をやっていないようであっても、実際は案外行なっている場合が多い。相談所やセンターで行なっているようなものでなければ教育相談ではないとは考えたくない。日常の諸々の学校生活の中で、子どもたちとの触れ合いに、教育相談の精神を意図的、計画的に活用して、教育相談の気運づくり、教育相談の着実な位置づけ、そして自発相談へ高まりをめざしたいと考えている。

1 昨年度までの実践

私たちの学校では、一昨年度末、生徒指導上の問題点を集約して生徒の実態から4点を拾い出した。学区は6小学校区から成り、広範囲で、町場、平場、山地という地域を背景に問題点は、1 問題解決への姿勢 2 言動の自主、自発、主体性 3 基本的生活習慣の最低限度の徹底 4 奉仕、和の心に欠けるところがあるというものだった。

そして昨年度、この4つの問題点から、生徒指導上次の主題を設定して、全職員が一致協力して取り組むことにした。

- (1) 生徒個人自らの生活上の問題点解決への姿勢育成
- (2) 集団場面における問題解決の姿勢の育成
- (3) 好ましい生活習慣の育成
- (4) 奉仕と協調心の育成

私はこの第1番目、「生徒個人自らの生活上の問題点解決への姿勢育成」に、昨年度赴任してきて以来、主として取り組んできたが、結局昨年度は、教育相談の紹介というオリエンテーション的な働きかけという程度で終わってしまった。主な事項は、教育相談の意義、学校で行なわれる教育相談の特質、教育相談の方法、面接の進め方、治療的援助（解決への手だてを与える）と開発的援助（問題意識を喚起する）、学級担任が行なう場合の心構えといったことで、これらについての理解を深め、実践するという段階で終わった。

2 昭和45年度の実践

柿崎中学校は、黒岩、黒川、下黒川三中学校と名目統合し、新柿崎中学校となって第1年目、旧柿崎中学校は柿崎校舎という名称になった。生徒指導上の4つの主題には大きな変更はなく、そのまま研究課題として、新柿崎中学校に残された。柿崎校舎では、第1の主題は、昨年度のささやかな実践の上に立って引き続き、教育相談の着実な位置づけ（体制化）を図り、生徒が自発相談への意欲を高めること

を目標にした。そこでは、生徒の個人的な生活上の問題解決への姿勢を育成することをねらいとしている。第1の主題では柿崎校舎を中心とし、黒岩校舎を協力校舎にした。

統合と人事異動などで、年度当初は同一歩調を取りにくいこともあったが、何回かの全体会、部会等の研修をとおして、曲りなりにも教育相談ということに対する共通理解を得ようと努めてきた。現実の学校には、生活指導観が多義的で、共通理解を図るということは、口で言うほど生やさしい問題ではなく、話し合いや働きかけによる同一歩調、共通理解ということはいつも忘れてはならないことだと思われる。

(1) 教育目標とのつながり

「自己を啓発する 相互に尊敬し合う 明朗な生活をする」というのが、当校の教育目標である。生活指導が、学校の教育目標達成の重要な機能であることはいうまでもない。第1の主題の教育相談は、この教育目標の自啓、明朗ということを受けている。

(2) 生徒の実態

- ① 自己を見詰めたり、自己の置かれている環境から、表だてて悩みや疑問を出そうとしないものがある。
- ② 悩みや疑問があってもそれを解決しようとする意欲が乏しい。
- ③ 教師との話し合いを求めようとするもののがかなりいる。
- ④ 話し合いの機会を設けても、話そうとしないものがある。
- ⑤ ふだん教師と話をしないもののに、問題がないわけではない。

これらの実態については、年度当初、これまでの実践、観察等をもとに設定したわけであるが、後述のアンケート結果や、教育相談の過程にも、それが如実に表われている。

(3) 研究組織

上述の実態をふまえて、本年度の研究組織は、昨年度同様、柿崎校舎の全職員は、生徒指導上の4つの研究主題の部会のどれかにはいり、また他の3校舎の職員も必ずどれかの研究主題に取り組むことになった。柿崎校舎では、各学年4学級ずつあるので、各主題推進の意味をもって、各学年1学級ずつ推進学級を設定した。第3学年では4組であるわが学級が、編成変えがないまま、昨年同様、第1主題に当たることになった。現在、当校には専任カウンセラーは置かれていない。したがって教育相談には主として各学級担任が取り組むことになっている。(研究組織図は次ページ参照)

(4) 研究上の努力点

- ① 本人の自己および環境の認知 — 作文、日記、生活設計、諸調査、日常生活行動のあり方などとおして。
- ② 教師に対する親和感育成 生徒と肌で接し合ったり、共感的理解を図ろうとする毎日の教師の言動のあり方とおして、秘密保持をどう考えるか。
- ③ 教師の研修 事例研究、教育相談技術の向上のための共通理解を図る。

(5) 研究実践計画

一つ一つの実践計画は、もうそれだけで十分な研究課題となるが、これらの生徒理解のための方法、

手段は、実態を考慮した上での着実な教育相談の位置づけによる自発相談への姿勢育成への方法、手段として実践に当たることとした。

① 一学期

生活目標設定、家庭訪問（町内）、事例研究会、生活設計（テスト前）とその記録、悩みの調査、交友関係調査

夏期休業前の定期相談、YGT実施 — 関連行事として、健康診断、学級PTA、父親学級

② 二学期

生い立ちの記（幼時、小学校時代）、家庭訪問（町外）、交友関係調査、生活設計とその記録
生活目標設定、事例研究会、夏休み後の定期相談 — 関連行事として、読書指導、学級PTA

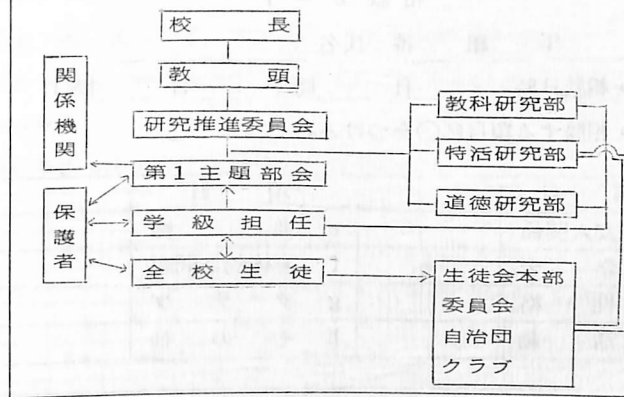
③ 三学期

進路決定 進級前の定期相談、年間反省、事例研究会、生活設計とその記録 — 関連行事として、学級PTA

④ 年間随時

呼び出し相談、チャンス相談、（自発相談）、作文、日記、グループノート、日常の言動観察

図1 研究組織図



定期教育相談の実施

1 定期教育相談のもち方

(1) 期間 1か月 (2) 時間 始業前、昼休み、放課後、1人10分程度

(3) 相談者 各学級担任 (4) 場所 各教室 (5) 方法 各教室に相談カードを用意しておき
相談前に生徒が提出する。それを受けた学級担任は、日時を変更する場合は（ ）の中に日時を
書いて生徒に返して連絡をする。

クラブを欠席するときは、事前にクラブ顧問に届け出る。

(6) 相談のときの生徒への約束

① 秘密を守る。

② 学業成績には全く関係しない。

③ 相談する内容はどんなことでもかまわない。

④ その他できるだけ援助、指導、助言をする。

(7) 記録

表1 相談カード

相談カード

年 組 番 氏名

相談日時 日 時 (日 時)

相談する項目に○をつける。

項 目		項 目	
a 友人関係		e 進 路	
b 学 習		f 身体的な問題	
c 性 格		g ク ラ ブ	
d 活 動		h そ の 他	

- ① 相談者が相談票にそのつと記録する。
- ② 保存場所を一定にする。
— 電話ボックス脇の書類棚

表2 相談表

相談表 年 組 番 氏名

回	月 日	項 目	相 談 内 容	相 談 者
1				
2				
3				

2 これまでの実践経過

- (1) 対象 柿崎中学校3年4組 男20名, 女19名, 計39名
- (2) 実践概況

クラブ活動は、教師と生徒と心のつながりを持ち、教師が生徒と肌を接し合うという密着感や信頼感の溢れる生徒指導の場とも考えられる。運動クラブは一学期中、文化クラブは9月末頃まで放課後は活発に行なわれている。

一学期中、私は学級の生徒全員と個々にゆっくり話し合う時間を設けたいと思いながら、クラブ指導などで、あまりその時間が生み出せなかった。一学期の学業成績関係のことでは、短時間ではあったが各人と面接の機会をもったにすぎなかった。しかし、心の中ではカウンセリングの精神を常に生かしたいと思い、そのことは授業中、朝夕の短学活、クラブ指導、日常の生徒指導において絶えず念頭を離れなかった。また、根気強く、努めて共感的理解をするように心がけている。

夏休みが終わり、二学期に入ってから、生徒と放課后面接する時間がかなり取れるようになった。3年生の大半は、クラブ活動の第一線から一応退いた形になり、時間のゆとりが見出せたからである。9月に行なった定期相談では、実態の考察にあったように「h項、その他」にして相談カードを出した者男子16名、女子10名であった。「その他」にした理由をきくと、「話すことがないから」とか、「特に問題や悩みがないから」と言う。他には、b項 学習 男子2名、女子2名、e項 進路 男子2

名，女子7名があった。これまでは，自発相談に女子1名あったにすぎない。

7月末に行なった悩みの調査では，他のクラスに比して全体的には大差がなかったが，○印のついた項目は，比較的他クラスよりも少なかった。

ア 勉強 イ 友人 ㊦ 家庭上 ㊥ 自分 オ 生活態度 カ 将来 ㊤ 学校

この調査によるとささいなものであっても，悩みや問題をもたない者はなかったが，教育相談にはそれが全くといっていい程出てこなかった。

表3 ① 悩みの調査で回答数の多かったもの（10人以上のもの）

（実数）

ア 勉強のこと	男	女	計	エ 自分のこと	男	女	計
不得意科目があつてこまる	16	17	33	はずかしがりやでこまる	6	6	12
勉強してもわからないことが多い	5	5	10	すぐかとなるのでこまる	6	8	14
成績の番数（順位）が気になる	5	6	11	他人にたよりすぎる	5	8	13
どうも勉強する気になれない	14	9	23	カ 将来のこと	男	女	計
勉強のしかたがわからない	8	10	18	どんな職業に就職したらよいか	6	7	13
				進学したいが成績が気がかりだ	12	12	24

② 教育相談についてのアンケート

定期相談で，その他の項目が多かったことと，多少なりとも個人的な悩みや問題をもっているはずの生徒からの自発相談が見られなかったのを探るために，アンケートを10月12日に行なってみた。記入は男女別，無記名で実施。

㊦ 悩みの調査によれば，小さいものかもしれないが多少なりとも悩みや問題をもっていることにな
表4 るのだが，あなたはそれを解決しようと思わないか（1つに○）（女）未記入 1名

解決することについて	男	女	計
ア 解決しようと思わない	1	1	2
イ 解決したいが，人に相談するまでもない	6	7	13
ウ 解決したいが，人に打明けられる内容でない	0	3	3
エ 解決したいが相談する人がいない	1	1	2
オ なんとか解決したいと思う	12	6	18

「解決しようと思わない」
の2人についてその悩みを
どうしようと思っているか
をきくと，
男秘密にしておきたいから
女だれにも話さない
ということだった。

① あなたが悩みや問題をもったとき，どんな人と相談したいと思うか。該当する項目ごとに1つ

表5 ずつ答えなさい。（10人以上あったもの）

（実数）

	勉強	友人	家庭上	自分	生活態度	将来	学校	計	順位
友 人	17	9	2	11	1	4	6	50	①
母	2	1	3	2	3	9	3	23	②
学 級 担 任	5	1	3	1	3	6	2	21	③
父	2	1	4	0	1	6	0	14	④
兄 弟 ， 姉 妹	5	1	2	1	1	2	0	12	⑤

㊦ 悩みや問題をもったとき，第1に選ぶ相手は ① 友人 51 ② 母 27 ③ 学級担任 24

④ 父 20 ⑤ 兄弟，姉妹 11 となり，㊦の表と順序も変わらない。

㊥ 第2に選ぶ相手は、① 友人31 ② 兄弟、姉妹29 ③母23 ④ 学級担任18 ⑤ 父18 ⑥ 上級生13となり、前記㊤、㊦とは多少順序が変わっている。

表6 ㊦ これらの人を選んだ理由はなにか。（該当するものに○）（実数）

選んだ理由	男	女	計
ア 親しみやすいから	4	1	5
イ 話しやすいから	7	8	15
ウ 自分のことをよく知ってくれると思うから	5	5	10
エ 話をよくきいてくれるから	3	1	4
オ 話せば何らかの解決や気休めになるから	4	6	10
カ 日常顔を合わせることが多いから	1	1	2

キとしてその他の項を設けたが、回答者はなかった。

表7 ㊦ 今後のあなたは何か悩みや問題があったら教育相談に先生（学級担任に限らない）の所へ行こうと思っているか。（1つに○）（女）未記入 2名 （実数）

相談することについて	男	女	計
ア 行こうと思っている	2		2
イ 行きたいと思うが、何となくおっくうである	6	6	12
ウ 行きたいが、教務室へ入りづらいから行きたくない	1	0	1
エ 教務室や廊下で、機会があったら話しかけてみたい	0	1	1
オ 行きたくない	11	10	21

アンケート調査結果は他クラスと比して、それ程大差はなかった。

おわりに

悩みや問題を生徒がもったとき、それが相談する価値がないと判断したり、あるいは相談するまでもないと考えたりする傾向がある。またなんとか解決しようと思う者は、友人を相談相手に選びたいと思うことが多いし、現実を選ぶ第1の相談相手は、やはり友人が多い。その理由としては、話しやすいから、自分のことをよく知ってくれると思うから、話せば何らかの解決や気休めになるからというのがあげられた。

今後、悩みや問題があっても、教師の所へ来たくないというものが過半数もいる。相談時間がとれない。共通理解が図れないといっではいられないようだ。自発相談への道はまだまだけわしい。

改めて、教育相談で陥りやすい点を考えさせられる。即ち、すべての生徒が対象であるのに、非行防止に焦点を合わせやすい。生徒を教師のとりこにすることが教育相談のこつと考えがちである。また面接では、結論を急ぎすぎる、根掘り葉掘りききやすい、教師本位の傾向がある、権威的な気持ちでききやすい、現象的な面に目を奪われやすい、考える余裕を与えない、受容に欠ける、といった点である。

多忙を口実にせず、形式にこだわらず、生徒との親和感、信頼感育成のため、共感的理解を得るため教育相談的精神をいつも忘れず、生徒と接していくことが、私たちに最も必要と思われる。